

# 空間の資本制的生産と経済危機

## デヴィッド・ハーヴェイの「空間的回避」の概念について

ベルント・ベリナ\* (遠城明雄\*\* 訳)

Bernd Belina

Kapitalistische Raumproduktionen und ökonomische Krise

Zum Begriff des Spatial fix bei David Harvey

*Zeitschrift für Wirtschaftsgeographie* 55-4, 2011, pp.239-252

Translation permitted by the author and publisher

空間の資本制的生産と経済危機。デヴィッド・ハーヴェイの空間的回避の概念。

ドイツ語圏の経済地理学において、資本制の空間経済の理解に対するデヴィッド・ハーヴェイの貢献はほとんど取り上げられていない。本稿の関心の中心は、ハーヴェイの研究を論じることで、ハーヴェイが展開した空間的回避と空間的・時間的回避という概念の正確な意味を再構築することにある。またハーヴェイの構造的固有性、資本の第二循環、建造環境を通じた固定資本の流通といった概念についても議論する。2008/09年の金融経済危機の空間的側面と、それに先立つフォーディズムの危機への新自由主義的な対応を事例にして、これらの概念が複雑な経済的・政治的諸関係とその空間性をいかに明らかにすることができるかを示すことにする。

キーワード：資本制、空間的回避、空間的・時間的回避、グローバル化、経済危機、デヴィッド・ハーヴェイ

### 序論

「しばしば無視されているが、新しい地理と新しい空間諸関係の生産を通して、貨幣が獲得される（時に失われる）ことは、資本制の再生産の根本的側面である。」(Harvey, 2010, p.181)<sup>1)</sup>

シャンプSchamp(2011, p.104)は、つい最近本誌で、「経済地理学は今日、世界規模での危機の根本的理由と長期におよぶその作用に取り組むための十分な準備が足りていない[ように思われる]」と述べている。彼は、経済地理学の理論的な空白状況として、主に「全体システムとしての資本制的世界経済の理解、マクロ経済学の視点の欠如、金融部門と実体経済の相互作用に関する無知、時間概念の欠如」を挙げた(Schamp 2011, p.106, 強調は原文)。こうした状況に直面して、シャンプは特にレギュレーション理論との新たな取り組みを提案している。驚くべきことに、彼はデヴィッド・ハーヴェイの名前にまったく言及していないが、これは経済地理学にとって徴候的なことであるように思われる。特に都市形成Urbanisierung、空間、ポストモダニズム、新帝国主義、新自由主義が問題となる時、ハーヴェイは社会諸科学やアングロアメリカ地理学のいくつかの研究分野

において、最も読まれ議論される著者に数えられる。しかし、こうした研究領域と異なり、ここドイツの経済地理学においてはかなり以前から、またアングロアメリカの文脈でも約20年間余、ハーヴェイの研究はそうした役割を演じてこなかった。だが、こうした状況は現在の金融と経済の危機に直面して変化するかもしれない。シャンプとともに、「金融市場のリスク」という特集号に寄稿された諸論文のなかで、ハーヴェイの研究は部分的に中心的役割を果たしており、これらの論文はそうした変化の可能性を暗示している(Parnreiter 2011; Sablowski 2011; Zeller 2011)。ハーヴェイの研究とともに、資本制の空間経済に関して10年以上にわたって発展してきた理論が存在しており、それはまさに、2008/09年の金融・経済危機の空間的次元を理解するために重要な貢献となっている(Harvey 2010; 2011)。

本稿では、空間的回避spatial fix(Harvey 1981; 1982)というキー概念の再構築と議論が中心的な課題となる。ハーヴェイはこの空間的回避という概念によって、30年ほど前に資本制の空間経済の本質的側面のいくつかを把握した。以下の議論が示すように、この概念によって、資本制的蓄積とその空間的諸次元の、現在および過去と将来の危機を説明することが可能になったのである。第一に空間的回避

\* ゲーテ大学 (フランクフルト・アム・マイン)

\*\* 九州大学

という概念によって、特に資本制的経済過程の解明のために、空間の社会的生産の重要性が強調されるようになった。第二にこの概念によって、資本制的過程の論理はその政治的調整と切り離しがたく結びついているものとして理解されるところ、マルクス理論の解釈が強化される。第三にこの概念は、理論上は容易に演繹できると思われる結論を超えて、経験的分析の再生という必然的な要請を具体化するようなマルクス主義的研究の理解を代表する(Harvey 2011, p.11を参照)。ただ概念に関する議論を主題とする本稿においては、この要請は事象の性質に応じて当該分野の研究に基づく例示を通して、推論としてのみ導かれることになる。

最初に中心となるのは、**空間的回避**に関する概念および理論の研究である。「概念の利用は、その概念の助けによって可能となる論述においてのみ示される」(Hauck 2006, p.94)ので、それに続いてこの概念の生産性が2008/09年の金融・経済危機の事例として説明される。まずハーヴェイの研究が地理学と批判的社会科学のコンテキストに埋め込まれる。次にすでに示されていることだが、ハーヴェイがマルクスを用いて研究する際の技法と様式が、マルクス主義内部の議論に位置づけられる。そして、**空間的回避**ないしは**空間的-時間的回避spatio-temporal fix**の概念の議論と、2008/09年の経済危機に基づくその概念の能力の説明が本稿の主要部分となる。結論では、これまでの議論を要約した上で、経済地理学はハーヴェイとマルクスに取り組むべきであると奮起を促すことになる。

## 地理学と批判的社会科学のコンテキストにおけるデヴィッド・ハーヴェイの研究

新自由主義的な大学の風景を基準にすると、デヴィッド・ハーヴェイは間違いなく現代の最も重要な地理学者である。2000年代の「社会科学引用インデックス」における引用回数を利用すると、ハーヴェイは4位で上位20名に入る唯一の地理学者である(<http://anneberg.usc.edu/Faculty/Communication/~media/73EE18E8CC9140A28F46C8E49F85C78D.ashx>, 2011年6月10日)。それにもかかわらず、経済地理学とドイツ語圏では、特に目立って引用されているわけではない。したがって、ハーヴェイの研究を論じる以下の引用論文は、他分野(たとえば、都市研究、帝国主義論、時代診断)の議論か

あるいは例外である。例外とは規則を確認するものであり、おそらく批評と評価の場合、この規則をしばしば明確に主題的に論じることになる。

グーグGough(2004, p.514)は、ハーヴェイの『空間編成の経済理論』(1982)に関する論文のなかで次のように断言している。1970年代から80年代のアングロアメリカの経済地理学において、マルクスによって彫琢された政治経済学批判の理解が重要性をもっていたが、その短い期間以後1990年代に入ると、マルクスはもはや重要でなくなり、それにともなってハーヴェイの仕事も主流派にとって重要でなくなった(一般に英語圏地理学におけるマルクス主義の役割として、Smith 2001を参照)。ドイツ語圏において、ハーヴェイは1970年代と80年代のその画期的な研究以後、わずかに都市研究(Keil 1987)と地理学(Ossenbrügge 1983)においてのみ認知されてきた。ここドイツの地理学では1990年代に至るまで、マルクスの伝統における理論への関わりは周辺的なものとなったので(Belina/Best/Nauermann 2009 ;Belina 2009を参照)、ハーヴェイの研究は標準科学の活動にあまり影響を及ぼさなくなった。この点で『ポストモダニティの条件』(Harvey 1989a[1999])の国際的な大成功によって、ハーヴェイはアングロアメリカ圏では学問の垣根をはるかに越えて著名となったにもかかわらず(Castree 2006, p.47; Ward 2007, p.1062)、ドイツ語圏ではほとんど何も変わらなかった。特に帝国主義と新自由主義に関する彼の最近の研究によって、こうした傾向がさらに強まり、ハーヴェイはグローバル資本制という時代を診断する最も重要な理論家の一人となっている(Castree 2006b)。ドイツ語圏の議論では、こうした傾向は特に批判的社会科学に表れており、『ニュー・インペリアリズム』(Harvey 2003[2005])、『新自由主義』(Harvey 2005a[2007])、“Spaces of global capital”(Harvey 2006)がドイツ語に翻訳され、これらの研究は特に批判的国家論や帝国主義論において活発に論じられている(Deppe et al. 2004; Gertenberger 2007; Görg 2004; Tenbrink 2008; Wissel 2004; Wissen 2011を参照)。

とりわけアングロ圏の批判的社会科学におけるハーヴェイの研究の魅力は、空間の社会的生産の重要性をマルクスMarxsche理論に統合し、この理論をさらに発展させることに成功した点にある。ハーヴェイは**空間的アプローチ**(Harvey 1969)の理論的基礎づけを行った後、「空間」概念に取り組んできた。シュミット(Schmid 2005, p.44)が強調するように、このアプローチの上に、空間の生産という現在の

マルクス主義の議論は依拠している(Harvey 1973; 1989a; 1989b,p.1; 1990(2007a); 2006,pp.117(2007c, p.125))。したがって、ハーヴェイはどの時点でも、「地理学」理論を発展させようとしたり、「空間」あるいは「人間-自然関係」を**抽象的に**中心に位置づけることはなかった。そうではなくて彼にとって重要だったのは、社会理論ないしは空間の生産をめぐる政治経済学批判を拡張することであった。

## 空間、社会的実践、「法則」

「史的唯物論」が歴史科学でないと同様に、ハーヴェイが考案し、今まで40年間にわたって研究してきた「歴史-地理的唯物論」(Harvey 1989a, p.355)も地理学ではない。むしろ「歴史的」という言葉によって示されているのは、マルクスの伝統における批判理論が「その全体的な歴史的生活形式の生産物としての人間を対象」(Horkheimer 1988, p217)とするということである。したがって、「科学の出発点となる現実性の諸関係は(…)、所与としてではなく」(同上)、歴史的に生成する社会的に生産されたものとして把握される。ハーヴェイの歴史-地理的唯物論において、この考え方が空間の次元に転用され、空間はその物理-物的な物質性とその意味において、社会的に生産されたものとして概念化される。そして、社会的に生産された空間が、社会過程においてどのような重要性を持つかが問われることになる。同時代にハーヴェイとは独立に類似の思考を発展させたアンリ・ルフェーブ(Lefebvre 1972, 1974; Schmid 2005を参照)と同様に、ハーヴェイの思考は、主にマルクスが1844年に書いたフォイエルバッハ第一テーゼに従っている。「これまでの唯物論の主要な欠陥は、対象、現実性、感性が客体あるいは直観の形式でのみ把握され、人間の**感性的活動、実践**として、主体的に捉えられてこなかったことにある」(Marx 1969,p.5 強調は原文)。ハーヴェイが、「空間の適切な概念化という問題は、空間に関わる人間の実践を通して解決される。言い換えれば、空間の本質をめぐる哲学的問題に対する哲学的な答えはない。答えは人間の**実践にある**」(Harvey 1973, p.13)と書く時、彼はこのテーゼに従っている。ハーヴェイは「貨幣、時間、空間、都市」(1989b)や「キーワードとしての空間」(2006 (2007c))のなかで空間を抽象的に論じているが、それにもかかわらず、具体的実践と過程において「空間」がどのように重要な

のか、空間のどのような概念化がその根底にあるのかという問いが問題となるのである。したがって、ハーヴェイは、絶対空間、相対空間、相関空間、あるいはルフェーブ(1974)とともに、経験された空間、概念化された空間、生きられた空間を区別するが、「これらの概念の区別は、研究される諸現象の性質に依存する」(Harvey 2007c, p.133)。空間の概念化の問題は、もはや社会空間的な諸現象の科学的研究の問いではなくて、「空間」に対するそれぞれの日常的・実践的な関連性とみなされる。そしてこの関連性は、常に名指すことが可能な社会の目的に向かって、社会的コンテクストにおいて生じるが故に、「空間の意味は[…]このコンテクストに完全に依存している」(同上, p.125)。ハーヴェイが空間の重要性をめぐる、第一に取り組むコンテクストは資本循環であり、それは空間的不均等発展において出現し、「資本制の諸機能の副次的現象ではなく、その再生産にとって根本的なものである」(Harvey 2010, p.213)。ハーヴェイは、『空間編成の経済理論』(1982)を出発点としてさまざまな個所で、以下で詳細に議論される概念、特に**空間的回避**ないしは**空間-時間的回避**を発展させてきた。

ドイツ語圏(経済)地理学には、マルクスに依拠した学問のさまざまな方法をめぐる議論やその対立・分化の伝統が存在しないので、空間-時間的回避の概念を議論する前に、ハーヴェイのマルクスへの関連性を手短かにまとめておこう。ハーヴェイのマルクス主義は、マルクス主義内部の明確な潮流のなかにはっきりと分類されないにもかかわらず、社会的実践と同様に、そこから生じる法則性を重視する潮流として特徴づけられる。マルクスの『資本論』と『政治経済学批判要綱』と同時に、特に経験が中心となる(この点で『資本論』第1巻のマルクスの理論的叙述は幅広い経験的資料によって説明されているが、死後に出版された第2巻と第3巻ではそのための時間がマルクスには足りなかった)。「資本制的法則」が行為主体を支配するとみる構造主義的説明に対して、ハーヴェイは、社会的実践を強調しており、おそらくグラムシの「史的唯物論」、つまり具体的な人間の活動(歴史)[…]、**行為Tat**の哲学(実践)(Gramsci 1992, p.493 強調は原文)、あるいはハーヴェイの「マルクス主義の仲間」(Merrifield 2006, p.80)であるルフェーブの「実践は出発点であり、終点である」という伝統に位置する(Lefebvre 1967, p.90)。同時にハーヴェイのマルクス主義は人文主義的潮流から区別される。この潮流において行為主体自身は、社会関係において生産されるというように概念

化される代わりに、社会関係の上位に位置づけられる。これに対してハーヴェイは、社会的に生産され妥当する「法則」の理解に関してマルクスに従っている。マルクスはその理論の中心となる価値法則を、「規則的な自然法則として暴力的に貫徹する」(Marx 1971, p.89)ものとして特徴づけた。ハーヴェイもまた、『ニュー・インペリアリズム』のなかで「資本の論理」(Harvey 2005b, p.39以下)について語る時、構造と行為の社会論理的な法則をこのように止揚することに従っている(これについてはHirsch 1994を参照; Demirovic 2010)。したがって資本は、マルクス(1988, p.822)によって、「特定の社会的・歴史的な社会編成に属する生産関係」として概念化される。ハーヴェイは近著において、資本制の法則について次のように述べている。「流体力学の法則は、時間の経過のなかで常にそのままであると仮定されるが、資本蓄積の法則は、人間の行動様式が新たな関係に再帰的に適応するので、絶えず発展する」(Harvey 2010, p.154)。

『ポストモダニティの条件』(Harvey 1989a, p.355)においてハーヴェイは、「歴史的-地理的唯物論は、理解のための閉ざされ固定された体系としてよりも、開かれたままの状態にある弁証法的な探求様式である。メタ理論は全体真理の言明ではなく、資本制の現在の局面と同時に、資本制一般を特徴づける歴史的かつ地理的な真理を受け入れる試みである。」とまとめている。ポストモダニズムを観念論的思考様式として批判し、ポストモダニティを資本制の一局面として説明した書物のなかで、ハーヴェイが、「真理」という厳しい批判を受けていた概念と戯れているのは偶然ではない<sup>3)</sup>。彼はマルクスに倣って、真理を「対象の真理が人間の思考に到来するかどうかという問いは、理論ではなく実践的な問いである。実践において、人間は真理、すなわち現実と力、その思考を示す」(Marx 1969, p.5 強調は原文)ものとして理解する。

以上から、ハーヴェイが資本蓄積過程における空間の生産の役割と重要性について練り上げてきた概念が、理論上いかなる位置を与えられるかは明らかである。それは、空間の生産が重要になりうる体系上の場所を示すことによって、マルクスの伝統における政治経済学批判をさらに発展させる試みである。そしてこれが具体的事例にもあてはまるのか、つまり空間の生産が実際に資本制的政治経済学にとっても重要かどうかを、具体的に検討することが必要となる。

## 空間的回避ないしは空間的 - 時間的回避というハーヴェイの概念

空間的回避は、のちに空間的-時間的回避として語られるようになるが(Harvey 1981; 1982; 1985; 1999; 2001; 2003)、おそらくハーヴェイの最も成功したと同時に最も誤解されている概念である。ハーヴェイの空間的回避は、本来資本制における戦術としての空間の生産の特別な側面を意味していた。つまり、資本制において不可避免的に現れる過剰蓄積の危機の結果を、「地理的移动と地理的再編成」(Harvey 1999, xviii)を通じて克服する効果の試みである。私たちはこの主張とのちの議論の拡張を正確に議論する前に、概念の混乱を複数のしかるべき理由から説明しておく。

空間的回避は、「相対的に固定した不動の空間的秩序の編成の構築」を意味する「空間的固定」(Brenner 1997, p.549)ではないので、「危機以後の新たな[空間]編成」(Walker 2004, p.437)が問題ではなく、したがってそれは、「都市地域」や「国家」(Schmid 2005, p.44)、あるいは「統治組織と企業組織のブロック」(Boris/Schmalz 2009, p.627)のような「空間的に境界づけられた社会的まとまり」も意味していない。空間的回避はまた、「過剰資本が建造環境に投資される時、資本制的蓄積の限界は[...]一時的に食い止められる[...]」ことも意味していない。ハーヴェイのなかに、また以下の詳述においても、以上のすべての主張が見られるが、それは空間的回避という概念の中心的な内容を示していない。

英語圏同様にドイツ語圏の文献においても、空間的回避というハーヴェイの概念について取り上げてきた多くの別の関連文献や翻訳の根底には、「to fix」という英語動詞の意味に関する誤解がある。この動詞は、固定する、取り付ける、根を下ろすと同時に、何かを修正する、あるいは解決することを意味している。ハーヴェイは空間的回避を第二の意味で用いており、空間的になにかを解決する試み、空間の戦略的生産が問題となる(「to fix」の二重の語義とその活用は明らかである。Harvey 2001, p.24; 2003, p.115を参照)。ハーヴェイが最初に空間的回避に言及した際、それは「過剰蓄積と価値下落が地理的拡大によっていかに克服されるか」(Harvey 1981)をめぐる戦略として規定された。最初に資本論第1巻の最終章である「近代植民地論」(Marx 1971, p.792以下)に関連づけて提案された空間的拡大に、第二の変種として内部における空間の再構造化が加わった。空間的回避で、資本制内部のジレン

マが地理的拡大かあるいは地理的再構造化によって解決されるかどうかという問いが議論されることになる(Harvey 1985, p.141)。空間に固定された何かではなく、その反対のことで、つまり「空間的回避としての完全な移動性」(Smith 1984, p.149)が問題であった。以下では、空間的回避・固定Fixierungenは、資本の空間的移動性の可能性および結果として、ハーヴェイによってどのように理論的に理解されているか、また部分的には空間的-時間的回避という概念にどのように拡張されていくかが示される。空間的回避、つまり空間の生産による資本制危機の「修復」という基本的な考え方は、空間的-時間的回避において時間的延期を通して未来に拡大される。したがって、空間的回避はひとつの手段となりうる。

### 空間的回避：戦略としての資本の移動と空間

空間的回避は、『空間編成の経済理論』(Harvey 1982)において、『資本論』でマルクスによって提示された資本制の過剰蓄積危機の傾向から、厳密に導き出され展開された概念である。余剰貨幣資本にとって、利潤を獲得できる投資先を発見することがますます困難となる時、つまりハーヴェイ(Harvey 2010, p.26)が「余剰資本の吸収問題」として示したことであり、それが資本制において必ず規則的に反復される状況(Harvey 2010; Heinrich 2005, p.173以下)にある時、この危機が存在する。この経済危機は、生産資本、商品資本、貨幣資本、金融資本であろうと、必然的に資本の大幅な減価につながる。個々の資本家たち、分派あるいは全体としての国家資本、そして資本を蓄積する国家装置は、この危機を阻止しようとするので、関係する行為主体は切迫する減価に抵抗する可能性を求める。ハーヴェイ(1982, p.432以下)は、採りうる4つの空間戦略を挙げている。①新たな外国市場の開拓と商品資本の輸出、②生産の移転(生産資本の輸出)、③低コスト労働力の利用(国内の労働予備軍の増大、あるいは世界の他の土地における新たな賃金労働力の開拓による賃金切り下げ)、④減価の輸出(「経済力、金融力、国家権力の諸側面を攻撃的に利用して」別の場所で危機を生じさせる試みであり、それは国際政治と帝国主義への理論的移行を意味する)(Harvey 2003, p.107; Belina 2011を参照)。この4つの戦略において、関与する国家側から、国境を越えたそのつどの移動の政治的可能性が前提条件を形成する。これらの戦略は、資本制的蓄積の論理に内在する過剰蓄積問題を根本的に解決するものではなく、ただその結果を克服し

ようとするか、ないしはそれを空間的に移動させるだけなので、過剰蓄積の危機は確かに空間の生産を通じて遅延するが、決して阻止されるわけではない。「資本制に内在する矛盾に対して、永続的な「空間的回避」[...]は存在しない」(Harvey 1981, p.9)。むしろ、エンゲルス(1976, p.263)の古典的公式に倣うと、「資本はその危機的傾向を解決しない。ただ移動させるだけである」(Harvey 2011, p.11強調は原文)。

空間的回避によって、ハーヴェイ(1981; 1982; 1985)はもともと過剰蓄積危機への対策に戦略的に投入された手段として、空間の生産を特徴づけた<sup>4)</sup>。空間の生産が、資本蓄積に役立つように戦略的に導入されていることが重要である。したがって蓄積の法則性は、基本的に社会的に生産され、行為主体に物神化された形式で立ち現れる論理として理解される。行為主体はこの論理を手段として観察し、空間の生産を通してこの論理に影響を及ぼそうと試みる。

### 資本の空間的回避・固定 Fixierung：戦略としての時間

ハーヴェイは管見の限りで、『新自由主義』のなかで空間的-時間的回避という定式を初めて用いた。彼はそこで、余剰は、「(a)時間的延期・回避 Verschiebung[...]、(b)空間的移動・回避、(c)aとbの組み合わせを通して」(Harvey 2005b, p.111)吸収されると述べている。(b)については、上述した空間的回避という考えが語られる一方で、(a)の場合に投資が問題となる。それは、投資された貨幣が剰余価値となる可能性をもって、「将来的に還流する」ことである。ハーヴェイは、空間的回避と同様に、すでにこうした考察を『空間編成の経済理論』(1982)のなかで展開していた。そこでは特に体系的理由から空間的回避の考察から区別されて、別の名前で呼ばれていた。ここで、固定資本、建造環境、地域といった概念が中心的役割を演じることになる。空間を想起させるこれらの諸概念は、表面的な観察では矛盾をはらんだ概念であり、ここで空間は時間との関連で重要性を持つことになる。「to fix」の二重の意味とともに以上のことが、いわゆる概念の混乱の大きな理由であるかもしれない。この混乱のなかでこうした空間現象は、時に空間的回避として議論されることになる。以下では、これらの概念によって、危機への対応をめぐる、なぜ空間ではなく時間の重要性が中心となるのか、空間と時間は空間的-時間的回避のなかにいかに統合されるのか、を示すことが重要となる。行為主体が、還流と

いう時間的回避・遅延によって、過剰蓄積危機における価値下落に抗おうとする技法と方法について、ハーヴェイは『空間編成の経済理論』(1982)で議論しているが、それはのちに他の論者によって、時間的回避temporal fix(Jessop 2004)あるいは時間論temporal theory(Walker 2004)と呼ばれることになる。ウォーカーは、「誰もこれまで資本の蓄積と循環、過剰蓄積の時間的論理をこれほど十全かつ鮮やかに精緻化しなかった」(同上)とさえ述べている。

時間という側面は、マルクスの経済学批判において二つの場面で重要な役割を演じている。第一に、マルクス(1971)は資本制的に生産された商品の価値を、「使用価値生産のための社会的必要労働時間」と定めている。その際、社会的ということでは平均的な必要労働時間が考えられている。剰余利潤を獲得するために、資本家たちは、常にこの平均以下にとどまり、集合的にこの平均を引き下げようと努める。こうしてますます多くの商品が市場に投入されるが、市場はその範囲内に支払い能力をもたない需要の増加に直面する。以上のことから周期的に発生する過剰蓄積危機が生じる(要約としてHeinrich 2005, p.173以下を参照)。ハーヴェイの空間的-時間的回避という概念にとって、第二の役割がより重要となるが、それは第一の役割から生じ、時間のなかで中心となる。資本の流通時間は、生産手段の購入とその生産の利用、ないしは商品の完成とその販売の間の時間であり、またその大きさを変えることなく価値という形態でのみ流通する時間であって、「流通時間は生産時間とその価値実現過程を拘束することになる」(Marx 1971, p.128)。価値と剰余価値は、流通ではなく、生産において産出されるので(交通による価値付加という例外はある。Marx 1975, p.151を参照)、流通時間をできる限り短く維持すること、流通時間を短縮することが重要となる。以上から、ハーヴェイ(1989a)によって**時間と空間の圧縮**と名付けられた世界の「縮小」過程が、そのあらゆる社会的帰結とともに生じる(Dicken 2011, p.81以下; Warf 2008を参照)。「時間による空間の絶滅」(Marx 1983, p.430)という前提に必要なのは、資本はそのあらゆる形態において、高速道路と鉄道、港湾と運河、証券市場とグラスファイバーを通して、流通のたえざる加速を実現するということである。そしてここで資本制的価値は長期間にわたって空間に固定化されねばならなくなる。以上が「地理的矛盾」(Harvey 1997, p.34)の核心であり、「資本制は地理的景観を[生産する]が、[...]この景観は資本制の歴史のある契機として、資本制に固有の蓄積のダイナミズムに

適うものである。したがってこの地理的景観は蓄積に適応するために、繰り返して破壊され、のちに新たに建設されねばならない」(同上)のである。

空間に長期間固定されねばならない価値は、資本を流通させるようになるが、二つの際立った特徴を持っている。第一に、空間に埋め込まれた使用価値は、明らかにさらなる資本蓄積を生み出さないのに、価値はその不動性ゆえに常に減価に脅かされている。このため、場所に固定された価値の減価を共同で阻止するために、部分的に対立するさまざまな利害関係者が領域を基盤にして手を結ぶようになる。こうしてハーヴェイは、資本流通から地域の出現を説明する。空間的に固定された資本の減価の危険性が、地域的・局所的な連合の構築の理由となる。つまり、「建造環境への投資が資本流通のための地域空間を決定する。この空間内部では、生産、販売、交換、消費、(特に労働力に関する)需要と供給、階級闘争、文化、生活スタイルが、開かれた体系の内部で関係を持つ。したがってこの体系は一種の「構造的固有性」を示す」(Harvey 2007c, p.108ほか、1985, p.146; 1982, p.420; 2005b, p.111を参照)。第二に、価値の長期にわたる空間への固定は、追加的な機能を果たすことができる。つまり流通の加速という必然性の結果として、この方法によって貨幣の還流を時間的に長期間通過させることで、その結果いわば価値は滞留させられることになる。ここに過剰蓄積の脅威に対する**時間的回避**の可能性がある。

ハーヴェイは以上の関連性について、『空間編成の経済理論』の第二部で展開している。そこで彼は、固定資本ないしは消費元本の生産と使用を通じた資本循環の「過程の総体」を、資本の第二次循環と呼んだ(Harvey 1982, p.236)。私は別のところで、なぜ消費元本が資本循環の一部として把握されないのかを示そうとした(Belina 2010, p.16以下)ので、以下では固定資本の生産が中心となる。マルクスによると、資本流通の視点から、固定資本は次のように価値として定められる。つまり、この価値は商品生産(原料の場合のように)のなかに完全にはなく、工場設備、機械、コンテナ船の場合のように、「断片的」(1975, p.159)に入り込むのである<sup>9)</sup>。固定資本のこの部分的流通は、建造環境ないしは都市形成の形態で現れ、資本蓄積の全体過程のなかであまり考慮されてこなかったが、ハーヴェイにとって中心的な面となる。ハーヴェイは建造環境を、「人間の手によって作り出された巨大な資源体系」と特徴づけており、「これは使用価値から構成され、物的景観のなかに埋め込まれ、生産、流通、消費のために使用され

る」(Harvey 1982, p.233)。この資源体系は、資本還流の長い時間的地平のために**時間的回避**として機能する。固定資本への投資は直ちにはなく、長い時空間を通して利益を上げることになり、そのためより優れた使用への期待がのちの現実化の時点まで存続するのである(Harvey 1978, p112以下; Belina 2010を参照)。したがって、ハーヴェイにおいて、「資本の第二次循環」が「余剰資本」を吸収し、「長期間にわたる投資を形成することになる」(Harvey 2003, p.109)。これは、「信用体系に回避する場がなければ生産も存続されない」(Harvey 1982, p.225)とりわけ大規模な範囲と長期の回転に対する投資にあてはまり、そこで不動産投資を通して信用制度のなかに投資領域が生み出される。建設と金融という二つの部門は、長期にわたって国家による最も強力な調整を受ける蓄積領域に属する。建造環境への投資による**時間的回避**の可能性を、ここではまず国家が作り出さねばならない。

### 小括

迫りくる資本制の過剰蓄積の危機に対して、資本蓄積にとって重要な空間的かつ時間的側面への戦略的影響の研究がどのようにして可能となるか、そしてそれゆえに国家が特に立法を通して中心的役割を演じることが、再構成された。この社会的に生産され妥当する法則性は、デヴィッド・ハーヴェイによって作り出された**空間的回避**と**空間的-時間的回避**の概念に基づいて発展してきた。それゆえに上で暗黙のうちに示されたことは、最終的な批判という意味で、次のことをはっきりと提示している。つまり、**空間的回避**から**空間的-時間的回避**への拡大は、ハーヴェイによる資本制の空間経済論の観点から、新たな主張ではなく、別の概念を利用することで展開される側面を、「回避fix」という語彙に統合する試みであることを示している。したがって、ハーヴェイはおそらく概念の明晰さよりもむしろ混乱を引き起こした。それにもかかわらず、ハーヴェイが展開し(**空間的回避**、建造環境)、あるいはさらに発展させた(固定資本、資本の第二循環、地域)概念規定は、危機へと向かう資本制の空間経済を理論的に理解するために、きわめて適しているように思われる。以下では、このことを2008/09年の経済危機のいくつかの側面に基づいて示すことになるだろう。

### 空間的回避の失敗の連続としてのフォーディズムの危機

ブレンナー(2002; 2009)は、1970年代初頭以降の局面を「長期的な景気後退」と名付けている。フォーディズムと呼ばれる資本主義の局面がこの時点で突入した危機について、彼は、「景気後退を通しても持続された、製造業における過剰蓄積と過剰生産という解決されない問題が、経済成長の明確な要因」(Wolf 2009, p.335)となっていることに基づくと解釈する。ハーヴェイ(2003, p.108以下)は、この解釈に基本的に同意するが、そこには**空間的-時間的回避**の研究が演じる中心的役割がないと考えており、「資本制全体が、1970年代以降過剰蓄積という問題に周期的かつ持続的につきまといわれており」(Harvey 2005b, p.109)、それ以後の資本制の歴史は、「過剰蓄積という問題を中期的展望でもはや制御できない**空間的-時間的回避**の連続として解釈される」(同上、またZeller 2011, p72を参照)と主張する。近年の著作(Harvey 2008; 2010)では、さらに**空間的-時間的回避**が2008/09年の経済危機のなかで果たした役割が強調されている。

### 空間的回避：グローバル化

**空間的回避**という概念によって、2008/09年の経済危機以前に進行し、その結果が危機の現出と処理の方法に影響を及ぼすことになった中心的過程を記述することが可能となる。この過程はとりわけ資本制の空間組織の変化とみなすことができ、この変化はグローバル化と呼ばれ、フォーディズムの危機以降目覚ましい展開を見せている。つまり、生産資本と商品資本のグローバルな新たな達成、およびグローバルに流通する金融資本の重要性である。生産資本と商品資本のグローバル化は、4種類のいわゆる**空間的回避**のうち3つに基づき、グローバルな金融資本の発展は4番目の**空間的回避**を可能にし、それ自体がひとつの**空間的回避**となっている。

### グローバルな生産資本と商品資本

**空間的回避**の基本的設定において、ハーヴェイ(1982, p.432以下)は、空間の生産を通じた危機回避の戦略として、新たな市場の開拓、世界の他地域における新たな労働市場の包摂、生産の移動を取り上げた。この諸過程は、1970年代以降の資本制の発展を特徴づけるものである。70年代以降、これらの**空間的回避**が実行に移された技法と方法をみると

(Altvater et al. 2009; Brenner 2002; Harvey 2003; 2005a; 2010; Hirsch 1996; Huffschnid 2002)、純粋に経済的あるいは、完全に自動で進行するような過程ではなく、国家(国家間)政策を通して貫徹されねばならないような何かが重要であることは明らかである。最初にグローバルな資本交通のための制約の撤廃が、「次々に切り替えられる「空間的回避」の可能性を開いたのである」(Harvey 2010, p.50)。

グローバル化した資本制において、資本の制限としての国境の役割はますます小さくなり、資本の規模と生産性をできるかぎり求める企業、したがって資本制の大都市にある企業が有利になった。資本の交通のために国家の制限を撤廃し、領土に向かう地政学の意味を喪失させるようなシステムの国家(国家間)政策を、スミス(2005, p181)は抽象的な富の増大を目的とした地理的・経済的権力の行使と名付けて、「1980年代における資本制的グローバル化の開花によって、地政学的権力を超えて、地理・経済的権力が貫徹した」と主張する。ハーヴェイ(2003)も『ニュー・インペリアルイズム』で、資本制的帝国主義が「国家と帝国の政治」と「空間と時間における資本蓄積の分子的過程」(Harvey 2005b, p.33以下)の矛盾する融合であると論じる時、少し別の言葉を用いてであるが、スミスと同様の主張を行っている。この場合の帝国主義は、これまでの帝国主義のタイプとは異なって、「典型的に資本制的論理が支配している」。

商品資本と生産資本のために国家的制限を(選択的に)撤廃した決定的舞台となったのは、1980年代以降の国際機関、特に**国際通貨基金**と**世界銀行**というブレトン・ウッズ体制の諸機関、ないしは**世界貿易機関**(Peet 2003; Setton et al.2008, p.57を参照)、さらにG7/G8の先進国のグループもしくは新たなG20(準工業国は、「自由貿易のドクトリンを[...]そのつど国家の通商政策に利用しようとしている」)であった。

主要国の資本による全地球の諸資源と販売市場のグローバルな獲得は、1970年代以降ますます強化され、1980年代に貫徹されるようになったが、それは**空間的回避**がその状況で資本制のために成し遂げたことをはっきりと示している。フォーディズムという国家によって方向づけられ、「そこに埋め込まれた自由主義」(Smith 2005)において蓄積が直面した限界は、空間の生産、具体的には商品と労働力に対して次第にその重要性を増した世界市場の形成を通して克服された。同時に、1978/1980年頃の「世界の社会・経済史の革命的転機」(Harvey 2005a)とともに、グローバルな北の領域国家によって組織さ

れた社会が、新自由主義的イデオロギーの意味で再編成され、こうして階級支配の現代化が進捗することになった(詳細はHarvey 2005aを参照)。新自由主義と結び付けられることの多くが、領域国家の内部で起こり、国家によって実行された。したがって、中心的役割を果たしたのは、**空間的回避**ではなく、むしろイデオロギーと法律上の変容であり、経済と政治の組織に関わる転換であった。その結果、常なる競争と市場力が解放されるべきとされ、一方で貧困化、不安定雇用、社会的不安が、他方で民主的な正統性をもった機関の外部における富の集中と権力の増加が、それぞれ進むことになった。

**金融化**：しかしながら、新自由主義の実践の中心には、より拡大した**空間的回避**、つまり金融資本という資本の特殊な一形態のために地球を開くことがある。1970年代以降、余剰資本の吸収にとって、「国家による規制と国際機関による金融市場の積極的な規制緩和の集約的過程」(Huffschnid 2009, p.105; Huffschnid 2002, p.127以下を参照)が、生産資本と商品資本の移動性よりも重要になったのであり、この過程によって、「金融に支配された蓄積体制」が出現することになった(Chesnais 2004)。1970年代初頭に、少なくともすべての西洋諸国が、複数のタイプのケインズ主義的政策の明らかな危機に直面した。数年後、需要を管理するケインズ主義的プログラムと同様に、製造業が国際的規模で袋小路にはまり込み、このプログラムの転換が世界経済を復活させるにちがいないとされた(Brenner 2002, p.69)。この時期にアメリカ合衆国とイギリスでは、新自由主義の勢力がイデオロギーの影響力を獲得して、政治的实践に影響を及ぼすようになった(Harvey 2005a, p.43以下)。具体的にはこの両国は1970年代末に、マネタリズムと「サプライサイド」の経済政策へと向かい、これらの政策は、労働組合との権力闘争を引き起こした。こうした政策転換の中心にあるのが、「あらゆるものの金融化」(Harvey 2005a, p.33)という面である。この金融化は政治的に可能となり、新たな金融生産物の開発によってさらに推進されることになった(Altvater 2010, p.62; Huffschnid 2002)。金融化は、階級構造内部での権力の移動とともに起こり、工業的生産手段の特性に基づいていたフォーディズムの支配階級は、新たな階級、つまり金融資本を管理する立場にある階級に取って代わられる傾向にある(Harvey 2005a, p.31以下; またRoth 2009, p.54以下も参照)。こうして出現した金融支配による蓄積体制のなかに、「金融投資として利用され、企業利益に依存する[重要



な]資本の形態」(Chesnais 2004, p.218)があり、これが「蓄積の形態とリズムを決定する分派」となる。ハーヴェイ(2005a, p.70)は、この関連性において新自由主義国家の階級の性格を強調する。そしてこの国家は、具体的紛争において「典型的に金融システムの不可侵性と金融機関の支払い能力を、住民と自然環境の健全さよりも上位に置く」ということに表れている。近年の銀行の緊急救済策よりも以前になされたこの発言に関連する経験は、シェラー Scherrer(2008, p.545)によるリストから引用できるだろう。

このリストには1982年から2007年の間に、アメリカ合州国が問題に直面した金融資本を救済した全ケースが含まれている。「銀行を救済し、民衆から搾り取ることは、奇跡をもたらす。一銀行家にとっては」(Harvey 2010, p.19)。

1970年代以降、金融資本のための(ほとんど)グローバルな市場の形成は、それ自体が空間的回避を表している。多方面に及ぶ金融化において、空間の生産が重要な役割を演じていないとしても一たとえば、政策によって強制される老人養護の民営化や有価証券化の実践の場合、つまり大規模な労働消費のない「抽象的な法的行為」を通して「価値生産のない価値の内部留保」が行われる場合(Altwater 2010, p.62)一、金融部門の生産物の多くは、まさに通貨と証券の間の空間的移動の(政治的に作りだされた)可能性に基づいている。特に「利子の差は[...]、ある「資本の場」から別な場へ、ある通貨から別の通貨への資本の流通に影響を及ぼし」(同上)、通貨圏間の潜在的な**挺率**効果を可能にする。「貨幣は安価な場所で借入され、利子の高い場所に投資される」(Altwater 2010, p.64; また Harvey 2010, p.30を参照)。

他方で、金融システムを通して、4番目の**空間的回避**が作動することになる。つまり「経済的、財政的、国家的な権力の操作」(Harvey 1982, p.438)を通じた減価の危機の空間的移転である。「主要な結節点(ニューヨーク、ロンドン、東京)への政治的かつ経済的な権力の蓄積」(Harvey 2005b, p.133)のゆえに、そこを拠点とする行為主体は、「脆弱な地域での減価の危機を通してシステムを過剰蓄積から解放するために、その投機力を利用することができる」。場所的・地域的な減価と資本破壊の輸出によるグローバルな過剰蓄積に対するこの**空間的回避**に該当する事例(同上, p.124)は、1994/95年のメキシコ、1997/98年の東南アジア、1998年のロシア、1998年から2002年のアルゼンチンにおける経済危機であり、それは常にその住民たちの脆弱な部分の

さらなる貧困化へとつながる。こうした経済危機の文脈において、外交上の拒絶や危機を処理する際にブレトン・ウッズ体制が果たした役割という点で、減価の空間的移転の場合に、政治過程がきわめて重要であることは明らかである(同上, p.128)。1980年代以降のいわゆる地域危機とは反対に、現在の危機の中心的な特徴として、2008年夏に「1973/74年以来の三地域の同時的危機」(Roth 2009, p.44)が生じたことを把握する必要がある。世界経済の中枢の視点からすると、今回は富の破壊を経済的に脆弱な国家と世界の諸地域に押し付けることができなかった。グローバルスケール(Boris/Schmalz 2009)と同様に、ヨーロッパ連合内部(Becker/Jäger 2009)とドイツ内部(Schengler/Loibl 2020)においても、その帰結は空間的に異なって感じられている。

### 時間的回避：建造環境と構造的固有性

価値の空間的回避・固定は、現在の危機とその経過を理解する上で、二つの点で重要である。ひとつは、2008/09年の経済危機以前の局面において、特に世界規模で多くの資本が建造環境に流入していたこと、もう一つは、その結果、部分的に構造的固有性の新たな空間が生じていたことである。そしてこの固有性は、資本制の新たな空間的不均等発展とグローバルスケールにおける権力の移動に表れている。

**フォーディズムの危機と建造環境**：建造環境は、過去における「価値の貯蔵庫」として、**時間的回避**として特別な役割を果たしている。ハーヴェイは、この関連性について「長期の景気後退」(Harvey 2010, p.172以下を参照)のなかでの最近の一時的な景気上昇を説明する際、「都市形成は余剰生産物の吸収に際して[...]特に能動的な役割を演じる」(Harvey 2008, p.25)とする自らの理論的主張を引用している。ドットコム・バブルの破裂以降、合州国における不動産市場は、「インナーシティと郊外における住宅とオフィスの建設によって、余剰資本の大部分を直接的に吸収してきた」(Harvey 2008, p.29)。これは、その後グローバルな過程に展開し、とりわけイギリス、スペイン、中国にも波及した。1998年以降、「固定資本へ巨大投資」(Harvey 2005a, p.131)が流入した中国においてのみ、バブルは(まだ<sup>6)</sup>破裂しておらず、中国の都市形成は、ハーヴェイ(2008, p.30)にとって、「今日グローバル資本制の最も重要な安定剤である」。2000年代における資本の第二循環への投資は、**時間的回避**を構築してきたが、2008年頃の不動産危機によって突然終了したとい

うハーヴェイの命題について、その過程のいくつかの重要な側面が、さまざまな経験的研究を通して裏付けられている(Dörny 2010; Fox Gotham 2009; Heeg/Dörny 2009; Holm 2010)。これらの研究は、ドットコム・バブルの破裂と2008/09年の経済危機の間の「短い10年」に、世界の多くの地域で建造環境への信用金融の投資という形式で、資本の**空間的-時間的回避**が生じたこと、そしてその結果が、現在未完成の建物や空き店舗、特に合州国では自宅から立ち退かされた人々のホームレス住宅という形で表れていることを示している(Mayer 2011を参照)。

**構造的固有性の新たな空間**：空間的に固定された固定資本への包括的な投資とともに、生産能力の移転が、従来周辺化されてきた諸空間で起こっている。これによって、世界の諸地域で、領域的に組織された新たな構造的固有性の出現の基盤が形成され、そこで資本制的蓄積が成功を遂げつつある。グローバルな水準では、特にいくつかの準工業国の経済大国への上昇が挙げられる。1990年以降の中国(PROKLA 2010)とインド(Al-Taher/Ebenau 2009)の発展は、資本制の中枢部からの資本輸入が政治的・社会的に埋め込まれたことで、この輸入が持続的な経済成長の局面——新たな社会的歪みと大衆の貧困化を含んでいるが——につながったことを示している。ここで資本輸出を通じた**空間的回避**との関連で、ハーヴェイ(1982, p.435)によって議論された諸現象が重要である。つまり「新しい地域内部での成長は[……]資本制の生き残りにとって絶対に必要であること、しかしながら、それは中期的には「資本を輸出した地域の」国内産業にとって競争相手として脅威になること」である(Harvey 1985, p.155～156も参照)。最近10年間の過剰蓄積の危機は、特に今日成功を取めた準工業国の開発とグローバルな北の資本を通じたその利用を介して、つまり**空間的回避**を介して遅延させられた後、この準工業国においてその基盤の上に、たとえば固定資本への投資という形態で、資本制の中心部に対して投資先の競争相手を保護する構造的固有性の形成を通して、その場所に必然的に**時間的回避**が形成されていった。そしてこの競争相手は、最近の経済危機によって部分的にはグローバルな北ほど打撃を受けなかったのである。したがって、2008/09年の経済危機はグローバルな権力構造の変動にもつながり(Roth 2009, p.45以下)、それは国際機関にも表れている(『南ドイツ新聞』2010b)。

## 結論と展望

本稿の目的は、ハーヴェイの**空間的回避**の概念をドイツ語圏経済地理学のコンテキストのために要約的に論述し、2008/09年の経済危機に基づいて、その射程を示すことにあった。その結果、ハーヴェイによる資本制の空間経済理論と経済地理学で現在流行する理論との間で、いくつかの重要な相違点が明らかとなった。この相違点は最終的に3つの側面にまとめられ、それは経済、空間、政治に関する**ハーヴェイ独自の立場**を表わしている。第一にハーヴェイの研究はマルクスの経済学批判の伝統に基づいており、この伝統は他とは異なって、なぜ資本制的蓄積が必然的に恐慌へといたる傾向を持つのか、そしてこのことが通常いかなる結果をもたらすのかを説明するものである。第二にハーヴェイは、資本制の能動的契機として空間の資本制の生産の重要性を体系的に明確化することに成功している。第三にハーヴェイは、資本制と空間の関係は完全に政治的なものであり、それは権力関係と権力分化を通して構造化されることを強調する。全体として見ると、ハーヴェイによる資本制の空間経済理論は、経済地理学内部の支配的潮流とは明らかに区別される。支配的潮流の多くは、[成功した]地域と企業(Zeller 2003の批判を参照)と「積極的な経済成長の歴史」(Schamp 2011, p.104)に焦点を絞った結果、資本制の生産諸関係の全体的連関を見過してきた(Zeller 2011, p.65)。ハーヴェイの場合、この全体的連関こそが中心となるのである。

マルクス(1971 p.95)は、「ブルジョワ的な生産諸関係の内的連関」に関心を示さない経済学のことを、論争となる表現を躊躇せず用いて「俗流経済学」と呼んだ。マルクスは俗流経済学の人気を説明するために、資本制という経済形態自体にその理由の素地があると主張する。つまりこの経済形態が、それを能動的に生産し、物神化された仕方ですれに向き合い、自らの行為に権力を行使するように見える人間を作り出すのである。このような意味でルカーチ(1923 p.117)は、経済危機とはブルジョワ階級の経済的思考に乗り越えられない制限を設定する問題であると主張した。経済危機に直面して、少なくとも経済科学のいくつかの分野は似たような評価を下されるべきであると思われる。女王から経済危機による失敗の理由を問われたイギリスの経済学者たちは、「根本的には全体としてのシステムに対する危険性の理解に際して[……]、多くの知識人の共同的想像力の

失敗」(Harvey 2010, p.235の引用)を挙げているが、ハーヴェイはこうした公の告白を、「新自由主義理論および大学の新自由主義化と商品化に伴って、しっかりと根をおろしてしまった精神的観念」の容易ならざる影響の証明と見ている。

ルカーチに倣ってサイド(1983 p. 232)が確認しているように、「なぜ現実が客体と経済的「所与 *données*」の集合としてのみ現れるかを徹底的に考えることになるので」、危機とは、「思考する主体が物神化を逃れるまたとない機会をつかむ」契機となる。そして、近年の経済危機における、そしてこの危機をめぐる「俗流経済学」の失敗は、以下の契機を示している。つまりこの契機から、イギリスの経済学者によって語られた「全体としてのシステム」およびその空間的次元を含む資本制について、再び影響力を増すようになったデヴィッド・ハーヴェイの研究に目を向けることで、経済地理学者もまた展望を得るようになるかもしれない。

## 注

- 1) 外国語からの引用は著者の翻訳による。草稿に対してコメントをくれたミハエル・ミスナー、セバステリアン・シッパー、フェリックス・ヴィーガントに感謝する。
- 2) この本は世界中で10万冊ほど売れ、雑誌New Statesman/New Societyによって20世紀後半のベスト100に挙げられた(Smith 2001,p.10)。
- 3) 書名について言葉あそびが問題となっている。ブルードンの『貧困の哲学』を『哲学の貧困』としたマルクスの悪意ある改名のアナロジーで、リオタールの『ポストモダンの条件』も言葉あそびによって、ひっくりかえされるのである。
- 4) のちにハーヴェイは、別の空間的实践に対してもこの概念を用いている。その場合、空間的移動、拡大あるいは再構造化を通して、迫りくる過剰蓄積の危機に対する戦いとして別の目的が追求される。ハーヴェイはレーニン(1965 p.830)の主張を取り入れて、19世紀後半と20世紀初頭の帝国主義の空間的・時間的回避について、国内における政治的緊張と闘うために、社会的な緊張緩和の政治的手段、ないしは階級闘争における武器として利用されたと述べている(Harvey 2003 p.124以下)。またハーヴェイは別の場所で、移民によってそのイメージを実現するユートピア社会主義者の希望を、「労働者による固有の空間的回避」(Harvey 2000 p.30)の試みと呼んでおり、別の人物もこの概念の拡張に取り組んでいる。この意味における創造的発展のひとつの事例として、アンドリュウ・ヒロード(1997 p.17)の「労働の地理学」がある。ヒロードはこの地理学で、「労働者がいかにして一定の

空間的回避を創造し、自らの生活条件と欲求を有利にするかについて労働者の能動性を研究すること」を勧めている。空間的回避はここで、「労働者自身の再生産の問題に対して地理的解決」を求める労働者の戦術に関わるものとして理解される。

- 5) 船舶の事例は、固定資本が必ずしも空間に固定されねばならないわけではないことを明らかにしている(Belina 2010, p.12を参照)。
- 6) 南ドイツ新聞(2010a)のインタビューのなかで中国国家財産管理会社(Cinda Asset)の上級リスクマネージャーは、不動産市場について、「はい、私たちは特に大都市でパブルを抱えています。」と述べている。

## 参考文献

- AL-TAHER, H./ EBENAU, M. (2009): Phoenix und Asche. Indien und die Wirtschaftskrise. In: *PROKLA*, (39)4, 645-662.
- ALTVATER, E. (2010): *Der große Krach*. Münster.
- ALTVATER, E./BISCHOFF, J./HICKEL, R./HISCH, J./HIRSCHEL, D./HUFFSCHMID, J./ZINN, K. (2009): *Krisen Analysen*. Hamburg.
- BECKER, J./ JÄGER, J. (2009): Die EU und die große Krise. In: *PROKLA*, (39)4, 541-558.
- BELINA, B. (2009): Theorie, Kritik und Relevanz in der deutschsprachigen sozialwissenschaftlichen Geographie 40 Jahre nach Kiel. In: *Rundbrief Geographie*, 221, 18-20.
- BELINA, B. (2010): Krise und gebaute Umwelt. Zum Begriff des „sekundären Kapitalkreislaufs“ und zur Zirkulation des fixen Kapitals. In: *Z – Zeitschrift marxistische Erneuerung*, (20)3, 8-19.
- BELINA, B. (2011): Kapitalismus, Raum und Staatensystem in der Kritischen Geographie. In: Ten Brink (Hrsg.): *Globale Rivalitäten. Staat und Staatensystem im globalen Kapitalismus*. Stuttgart, 87-104.
- BELINA, B./ BEST, U./ NAUMANN, M. (2009): Critical geography in Germany. From exclusion to inclusion via internationalisation. In: *Social Geography*, 4, 47-58.
- BORIS, D./ SCHMALZ, S. (2009): Eine Krise des Übergangs. Machtverschiebungen in der Weltwirtschaft. In: *PROKLA*, (39)4, 625-643.
- BRENNER, N. (1997): State territorial restructuring and the production of scale. In: *Political Geography*, (16)4, 273-306.
- BRENNER, R. (2002): *Boom & Bubble*. Hamburg.
- BRENNER, R. (2009): Die Krise wird der Großen Depression gleichkommen. In: Brenner, R./ Dahn, D./ Hengsbach, F./Sassen, S. et al.: *Kapitalismus am Ende?* Hamburg, 25-30.
- CASTREE, N. (2006a): David Harvey's symptomatic si-

- lence. In: *Historical Materialism*, (14)4, 35-57.
- CASTREE, N. (2006b): Geography's new public intellectuals? In: *Antipode*, (38)2, 396-412.
- CHESNAIS, F. (2004): Das finanzdominierte Akkumulationsregime: theoretische Begründung und Reichweite. In: Zeller, C. (Hrsg.): *Die Globale Enteignungsökonomie*. Münster, 217-254.
- DEMIROVIC, A. (2010): Struktur, Handlung und der ideale Durchschnitt. In: *PROKLA*, (49)2, 153-176.
- DEPPE, F./ HEIDBRINK, S./SALOMON, D./SCHMALZ, S./SCHOPPENGERD, S./SOLTY, I. (2004): *Der neue Imperialismus*. Heilbronn.
- DICKEN, P. (2011): *Global shift*. 6ed. New York/London.
- DÖRRY, S. (2010): Europäische Finanzzenhren im Sog der Finanzialisierung. Büromärkte und Stadtpolitik in Frankfurt, London und Paris. In: *Informationen zur Raumentwicklung*, 5/6, 351-364.
- ENGELS, F. (1976): Zur Wohnungsfrage [1872]. In: *Marx-Engels-Werke*, Band 18. Berlin, 209-287.
- FOX GOTHAM, K. (2009): Creating liquidity out of spatial fixity. The secondary circuit of capital and the evolving subprime mortgage crisis. In: *International Journal of Urban and Regional Research*, (33)2, 355-371.
- GERSTENBERGER, H. (2007): Fixierung und Entgrenzung. Theoretische Annäherungen an die politische Form des Kapitalismus. In: *PROKLA*, (37)2, 173-197.
- GÖRG, C. (2004): Enteignung oder Inwertsetzung. In: *Das Argument*, (46)5, 721-731.
- GOUGH, J. (2004): The relevance of *The Limits to Capital* to contemporary spatial economics. For an anti-capitalist geography. In: *Antipode*, 512-526.
- GRAMSCI, A. (1992): *Gefängnishefte*. Band 3. Hamburg.
- HARVEY, D. (1969): *Explanation in geography*. London. 松本正美訳『地理学基礎論』古今書院、1979年。
- HARVEY, D. (1973): *Social justice and the city*. London. 竹内啓一・松本正美訳『都市と社会的な不平等』日本ブリタニカ、1980年。
- HARVEY, D. (1978): The urban process under capitalism. In: *International Journal of Urban and Regional Research*, (2)1, 101-131.
- HARVEY, D. (1981): The spatial fix - Hegel, von Thünen, and Marx. In: *Antipode*, (13)1, 1-12.
- HARVEY, D. (1982): *The limits to capital*. Oxford. 松石勝彦・水岡不二雄ほか訳『空間編成の経済理論』上・下、大明堂、1989・1990年。
- HARVEY, D. (1985): The geopolitics of capitalism. In: Gregory, D./ Urry, J. (Eds.): *Social relations and spatial structure*. Macmillan/London, 128-163.
- HARVEY, D. (1989a): *The condition of postmodernity*. Oxford. 吉原直樹監訳『ポストモダニティの条件』青木書店、1999年。
- HARVEY, D. (1989b): *The urban experience*. Oxford.
- HARVEY, D. (1990): Between space and time. Reflections on the geographical imagination. In: *Annals of the Association of American Geographers*, (80), 418-434. 堤研二訳「空間と時間の間で—地理学的想像力に関する省察」『空間・社会・地理思想』2号、1997年、54-78頁。
- HARVEY, D. (1997): Betreff Globalisierung. In: Becker, S./ Sablowski, T./ Schumm, W. (Hrsg.): *Jenseits der Nationalökonomie?* Berlin/Hamburg, 28-49.
- HARVEY, D. (1999): Introduction to the Verso edition. In: Harvey, D.: *The Limits to Capital*. Oxford [1982], xiii-xxviii.
- HARVEY, D. (2000): *Spaces of hope*. Berkeley.
- HARVEY, D. (2001): Globalization and the "spatial fix". In: *Geographische Revue*, (3)2, 23-30.
- HARVEY, D. (2003): *The new imperialism*. Oxford. 本橋哲也訳『ニュー・インペリアルイズム』青木書店、2005年。
- HARVEY, D. (2005a): *A brief history of neoliberalism*. Oxford. 渡辺治監訳『新自由主義』作品社、2007年。
- HARVEY, D. (2005b): *Der Neue Imperialismus*. Hamburg.
- HARVEY, D. (2006): *Spaces of global capitalism*. London/ New York.
- HARVEY, D. (2007a): Zwischen Raum und Zeit. Reflexionen zur Geographischen Imagination. In: Belina, B./ Michel, B. (Hrsg.): *Raumproduktionen*. Münster, 36-60.
- HARVEY, D. (2007b): *Kleine Geschichte des Neoliberalismus*. Zürich
- HARVEY, D. (2007c): *Räume der Neoliberalisierung*. Hamburg.
- HARVEY, D. (2008): The right to the city. In: *New Left Review*, (53)9/10, 23-40.
- HARVEY, D. (2010): *The enigma of capital*. London. 森田成也ほか訳『資本の〈謎〉』作品社、2012年。
- HARVEY, D. (2011): Crises, geographic disruptions and the uneven development of political responses. In: *Economic Geography* (87)1, 1-22.
- HAUCK, G. (2006): *Kultur*. Münster.
- HEEG, SJDÖRRY, S. (2009): Leerstände und Bauboom. Büroimmobilien nur noch ein Anlageprodukt? In: *Forschung Frankfurt*, (27)3, 30-36.
- HEINRICH, M. (2005): *Kritik der politischen Ökonomie*. Stuttgart. (3. Aufl.)
- HEROD, A. (1997): From a geography of labor to a labor geography. Labor's spatial fix and the geography of capitalism. In: *Antipode*, (29)1, 1-31.
- HIRSCH, J. (1994): Politische Form, politische Institutionen und Staat. In: Esser, J./ Görg, C./ Hirsch, J. (Hrsg.): *Politik, Institutionen und Staat*. Hamburg, 157-211.
- HIRSCH, J. (1996): *Der nationale Wettbewerbsstaat*. Berlin.
- HOLM, A. (2010): Private heißt Rauben. Zur Ökonomie von Wohnungsprivatisierungen. In: *Z - Zeitschrift marxistische Erneuerung*, (20)3, 46-59.

- HORKHEIMER, M. (1988): *Traditionelle und kritische Theorie*, In: Gesammelte Schriften, Band 4. Frankfurt am Main, 162-225.
- HUFFSCHMID, J. (2002): *Politische Ökonomie der Finanzmärkte*. Hamburg. (akt. und erw. Neuauflage)
- HUFFSCHMID, J. (2009): Europäische Perspektiven im Kampf gegen die Wirtschafts- und Finanzkrise. In: Alt-vater, E. et al., loc. cit. 105-228.
- JESSOP, B. (2004): On the limits of *Limits to Capital*. In: *Antipode*, (36)3, 480-496.
- KEIL, R. (1987): David Harvey und das Projekt einer materialistischen Stadttheorie. In: *PROKLA*, (17)4, 132-147.
- LEFEBVRE, H. (1967): *Der dialektische Materialismus*. Frankfurt am Main.
- LEFEBVRE, H. (1972): *Die Revolution der Städte*. München. 今井成美訳『都市革命』晶文社、1974年。
- LEFEBVRE, H. (1974): *La production d l'espace*. Paris. 齊藤日出治訳『空間の生産』青木書店、2000年。
- LENIN, W. (1965): *Der Imperialismus als höchstes Stadium des Kapitalismus*. In: Ausgewählte Werke, Band I. Berlin, 763-873.
- LUKÁCS, G. (1923): *Geschichte und Klassenbewusstsein*. Berlin. 城塚登・吉田光訳『歴史と階級意識』白水社、1991年。
- MARX, K. (1969): *Thesen über Feuerbach*. Marx-Engels-Werke, Band 3. Berlin, 5-7.
- MARX, K. (1971): *Das Kapital. Band 1*. Marx-Engels-Werke, Band 23. Berlin.
- MARX, K. (1975): *Das Kapital. Band 2*. Marx-Engels-Werke, Band 24. Berlin.
- MARX, K. (1983): *Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie*. Marx-Engels-Werke, Band 42. Berlin.
- MARX, K. (1988): *Das Kapital. Band 3*. Marx-Engels-Werke, Band 25. Berlin.
- MAYER, M. (2011): Das neue Elend der US-Städte: eine avancierte Form des Klassenkampfes von oben. In: *PROKLA*, (41)2, 253-272.
- MERRIFIELD, A. (2006): *Henri Lefebvre*. New York.
- OSSENBRÜGGE, J. (1983): *Politische Geographie als räumliche Konfliktforschung*. Hamburg.
- PARNREITER, C. (2011): Akkumulationszyklen und Hegemonie. In: *Zeitschrift für Wirtschaftsgeographie*, (55)1-2, 84-102.
- PEET, R. (2003): *Unholy trinity. The IMF, World Bank and WTO*. London.
- PROKLA (2010): Themenheft: China im globalen Kapitalismus. In: *PROKLA*, (40)4.
- ROTH, K. (2009): *Die globale Krise*. Hamburg.
- SABLOWSKI, T. (2011): Krise und Kontinuität des finanzdominierten Akkumulationsregimes. In: *Zeitschrift für Wirtschaftsgeographie*, (55)1-2, 50-64.
- SAID, E. (1983): Travelling theory. In: *The world, the text, and the critic*. Cambridge, Mass., 226-247. 山形和美訳『世界・テキスト・批評家』法政大学出版局、1995年。
- SCHAMP, E. (2011): Finanzkrise in der Weltwirtschaft — Theoriekrise in der Wirtschaftsgeographie. In: *Zeitschrift für Wirtschaftsgeographie*, (55)1-2, 103-114.
- SCHERRER, C. (2008): Bleibt das US-Finanzkapital trotz Krise hegemonial? In: *PROKLA*, (38)4, 535-559.
- SCHMID, C. (2005): *Stadt, Raum und Gesellschaft*. Stuttgart.
- SCHWENGLER, B./ LOIBL, V. (2010): Aufschwung und Krise wirken regional unterschiedlich. Nürnberg. (*IAB-Kurzbericht*, Heft 1/2010).
- SETTON, D./ KNIRSCH, J./ MITTLER, D./ PASSADAKIS, D. (2008): *WTO—IMF—Weltbank*. Hamburg.
- SMITH, N. (1984): *Uneven development*. Oxford.
- SMITH, N. (2001): Marxism and geography in the anglo-phone world. In: *Geographische Revue*, (3)2, 5-21.
- SMITH, N. (2005): *The endgame of globalization*. New York.
- SMITH, N. (2010a): „Weniger wachsen“. Ein Pecking Staatsfondsmanager über Wege aus der Krise. In: *Süddeutsche Zeitung*, 21. 10. 2010, 27.
- SMITH, N. (2010b): Mehr Macht für Schwellenländer. China, Indien und Brasilien erhalten auf Kosten Europas größeren Einfluss im Währungsfonds. In: *Süddeutsche Zeitung*, 25. Oktober 2010, 17.
- TEN BRJNK, T. (2008): *Geopolitik*. Münster.
- WALKER, R. (2004): The spectre of Marxism: The Return of *The Limits to Capital*. In: *Antipode*, (36)3, 434-443.
- WARD, K. (2007): 'Public intellectuals', geography, its representations and its publics. In: *Geoforum*, (38)6, 1058-1064.
- WARF, B. (2008): *Time-space compression*. Milton Park.
- WISSEL, J. (2004): Die neue Imperialismusdebatte. In: *Das Argument*, (46)5, 690-700.
- WISSEN, M. (2011): *Gesellschaftliche Naturverhältnisse in der Internationalisierung des Staates*. Münster.
- WOLF, F. (2009): Zur zweiten „Brenner-Debatte“. In: Brenner, R. et al., loc. cit. 331-345.
- ZELLER, C. (2003): Bausteine zu einer Geographie des Kapitalismus. In: *Zeitschrift für Wirtschaftsgeographie*, (47)3-4, 215-230.
- ZELLER, C. (2011): Verschiebungen der Krise im globalen Rentierregime. In: *Zeitschrift für Wirtschaftsgeographie*, (55)1-2, 65-83.

## 訳者あとがき

経済地理学とドイツ語圏地理学の両分野に全くの門外漢である訳者が、この論文の翻訳を思い立った理由は、ドイツ語圏におけるハーヴェイ研究の位置という地理思想的関心であり、ハーヴェイ空間論の理論的検討という視点では必ずし

もない(日本におけるこの方面からの最近の研究としては、大屋定晴「資本の地理的不均等発展—新自由主義的グローバル化への批判と現代資本主義論—」歴史評論741, 2012, pp.35-49 などがある)。アングロサクソン圏地理学のヘゲモニーに対して、周辺化されつつある非アングロサクソン圏地理学の「位置性」について考えたいというのが、訳者の主な問題関心である(この点について、Belina, B., Best, U. and Nauman, M.: Critical geography in Germany: from exclusion to inclusion via internationalization, *Social Geography* 4, 2009, 47-58. も参照)。ベリナ教授は、空間の社会的生産や国家論などアングロサクソン圏の「ラディカル・批判地理学研究」の潮流をドイツ語圏地理学に精力的に紹介されており、教授が編集者の一人を務められている『空間の生産：理論と社会的実践』シリーズ(“*Raumproduktionen: Theorie und Gesellschaftliche Praxis*”, WESTFÄLISCHES DAMPFBOOT, 2007 ~)の第1巻『空間の生産』(2007)は、ハーヴェイ、スミス、マッシー、ミッチェル、メリーフィールドなどアングロサクソン圏の代表的研究者の翻訳集である。

ただし、現在の金融危機の都市的起源を論じるハーヴェイの研究(The urban roots of financial crises: Reclaiming the city for anti-capitalist struggle, *Socialist Register* 2012, The Merin press 2011)や住宅抵当市場に関する社会学と地理学の研究(*International Journal of Urban and Regional Research*, 33(2), 2009)など、都市問題と金融危機の関係を分析する試みも活発化していることから、「空間的回避」および「空間的-時間的回避」という概念の展開とその可能性の検討を呼びかける本稿は、理論的な側面でも興味深い内容を含んでいるのではないかと思われる。

ベリナ教授の主な研究分野は、「犯罪性」、権力、イデオロギー、空間をめぐる研究であり、『犯罪の空間』(*Kriminelle Räume, Urbs et Regio* 71, 2000)と『空間 監視 管理』(*Raum Überwachung Kontroll*, WESTFÄLISCHES DAMPFBOOT, 2006)の著作のほか、地理学雑誌のみならず犯罪学やマルクス主義関係の雑誌にも論文を寄稿されており、ドイツ語圏社会地理学におけるこの分野の代表的研究者の一人であると言えるだろう。

門外漢ゆえに多くの誤訳があることを恐れるが、翻訳を許可していただいたベリナ教授と、『経済地理学雑誌』の編集者であるトミー教授および発行者にお礼を申し上げたい。なお本論文は、2012年度九州大学文学部前期授業(地理学購読V)においてテキストとして取り上げられた。授業に参加してくれた学部3年生の見島愛理、古森七瀬、村上喬亮の3名にも感謝したい。